

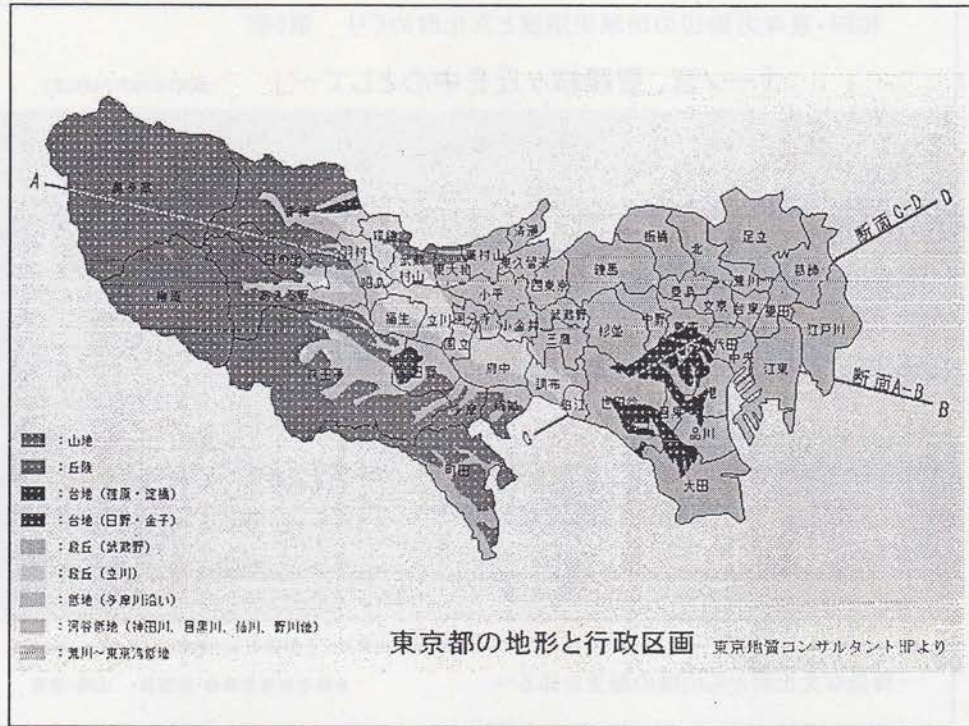
多摩市指定有形文化財調布玉川窓画図(弘化2・1845年)

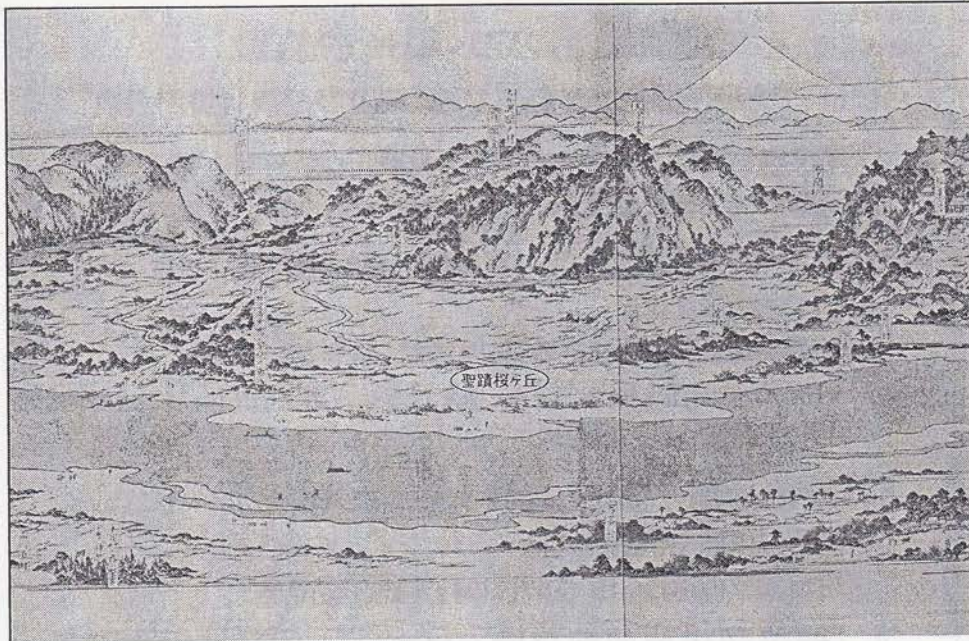
—身近な文化財から地域の歴史を知る—

多摩市教育委員会・学芸員 山崎・諸富

- 1.はじめに 多摩丘陵の地勢・地理的特徴
- 2.「聖蹟桜ヶ丘」とは、聖蹟桜ヶ丘周辺の文化財
3. 一ノ宮の歴史概要 ～原始・古代から近世・近代頃
4. 一ノ宮の主な文化財や伝承地

- ・ ①位 置：東京都の南部。神奈川県と接する。 ⇒ 相模国に隣接
東西：関東山地南麓・高尾から出て、東南東に向かい、登戸の南で南東に向きを変え、川崎市・横浜市周辺まで発達している。
- ・ 南：境川を隔てて相模野台地と接する
- ・ 北：多摩川・浅川を隔てて武蔵野台地と接する
- ・ ②規 模：東西約38km、南北約5～15km
- ・ ③標 高：230m～(多摩市蓮光寺164m)～横浜市西部70m前後
 - 多摩市内最高点標高：天王森公園(八坂神社)・・・161.7m
 - 最低位標高：関戸一丁目附近(聖蹟桜ヶ丘駅北側)・・・約53m
- (2) 地位的特徴：丘陵地形＝【谷戸(ヤト)】地形・武蔵野台地「ハケ」地形





多摩市指定有形文化財調布玉川惣画図(弘化2・1845年)



図1-4-1 明治22年頃の多摩村

聖蹟と名のつく場所や施設

・全国内でも殆ど散見できず ・東京都及び近隣(4箇所程度)

1. 「聖蹟桜ヶ丘駅」 [京王線駅名] (多摩市一ノ宮1-11)

○天皇行幸と桜の名所から

2. 「旧多摩聖蹟記念館」 [建造物] (多摩市連光寺5-1-1)

・市指定有形文化財

・東京都景観上特に重要な歴史的建造物等選定

○明治天皇の明治14年(1881)2回、15年(1882)、17年(1884)の4回の行幸の顕彰館(メモリアルホール)として

3. 「聖蹟公園」 [公園名・品川本陣跡] (品川区北品川2-7-21)

・区指定史跡(品川区北品川2-7-21)

○明治天皇の明治元年(1868)の行幸の行在所から

4. 「聖蹟蒲田梅屋敷公園」 [公園名] (大田区蒲田3-25-6)

○明治天皇の明治元年から明治30年(1897)の間の9回の行幸から

聖蹟と行幸・行啓の意味

・聖蹟とは、元は貴人等が訪れた史跡のことで、昭和初期には特に天皇の行幸地のことを指して用いられた。

【行幸と行啓】

・行幸：天皇が外出すること。みゆき。

・行啓：皇后・皇太子など、天皇以外の皇族の外出。

■明治4年(1871)の太政官布告以来、法律上の用語として使用された。第二次大戦後、これらの呼び名は廃止。

○「聖蹟」が多く残り、「聖蹟桜ヶ丘」の由来となった多摩市の聖蹟化とは。

【聖蹟化への道】

～天皇行幸：明治天皇4回（大正天皇・嘉仁親王9回）～

第1回：明治14年(1881)2月20日…… 兎狩

第2回：明治14年(1881)6月 2日…… 鮎漁

第3回：明治15年(1882)2月15～16日……兎狩



■明治15年5月31日御獵場指定告示

■明治16年(1883)7月6日連光寺村御獵場



第4回：明治17年(1884)3月29～30日……兎狩



■大正6年(1910)6月30日連光寺村御獵場廃止(35年間)

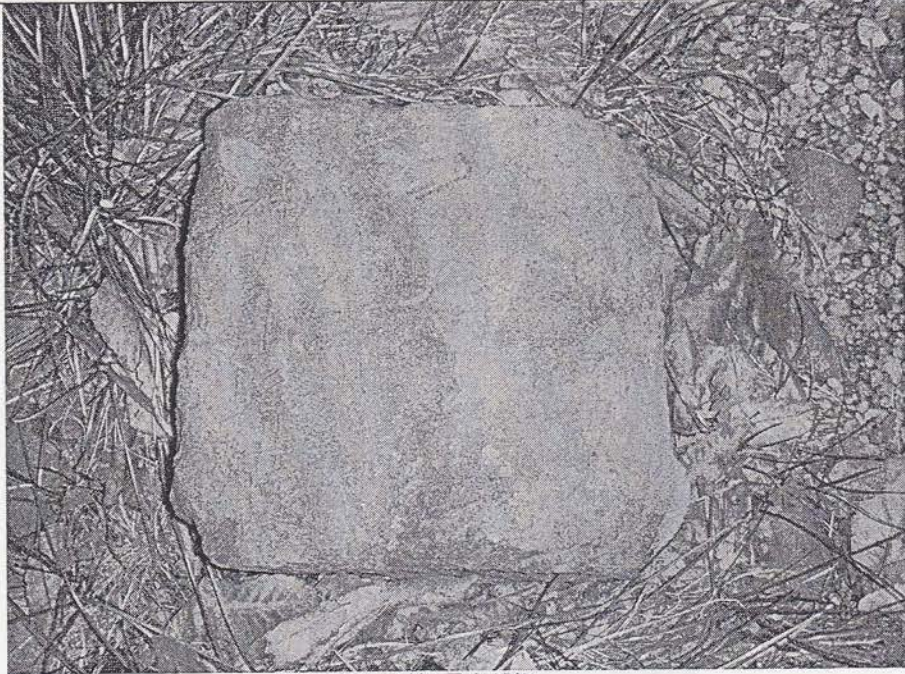
明治天皇多摩聖蹟行幸年表と御獵場の変遷

天皇・皇族による連光寺村での狩猟など（明治14～大正2年）

年	月日	来訪者	目的
明治14年	2月20日	明治天皇 東伏見宮嘉彰親王・北白川宮能久親王	兎狩
	6月2日	明治天皇 東伏見宮嘉彰親王・北白川宮能久親王・伏見宮貞愛親王	鮎漁
明治15年	2月15-16日	明治天皇 東伏見宮嘉彰親王・北白川宮能久親王・伏見宮貞愛親王	兎狩
明治17年	3月29-30日	明治天皇 東伏見宮嘉彰親王・北白川宮能久親王・伏見宮貞愛親王・有栖川宮威仁親王	兎狩
明治18年	9月22日	昭憲皇后（明治天皇皇后）	鮎漁
明治20年	8月21日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
	10月3日	英照皇太后（孝明天皇女御）	鮎漁
	10月17日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	栗の実・茸採取
明治21年	10月17日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	地理見学
明治25年	7月1日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
明治26年	10月8日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
明治33年	10月7日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
明治40年	8月2日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
明治41年	6月7日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
明治42年	7月18日	嘉仁親王（のちの大正天皇）	鮎漁
明治43年	7月18日	聡子内親王（明治天皇第九皇女）	鮎漁
大正2年	8月7日	裕仁親王（皇太子、のちの昭和天皇）	鮎漁

多摩市教育委員会・バルテノン多摩館新風雲回顧録展2011（『多摩市史 通史編二 近現代』より）





神奈川県推量標識

多摩川水量標識の由来

この水量標識は、明治25年4月に神奈川県が設置したもので、その当時、多摩市が三多摩の各市とともに百年前は神奈川県に属していたことがわかる資料の一つとして貴重なものです。

年月の流れの中で風化され、判読に不明な部分がありますが、次のように刻まれています。

【水量標識点ヨリ】
 【 拾尺【 】】
 【明治廿五年四月】
 【神奈川県】

また、「水量標識点ヨリ」と刻まれている部分の前にも、さらに一行何らかの文字等が刻まれていたものと思われます。

当時、氾濫を繰り返していた多摩川の水位を測る目安としていたのではないかと考えられます。

この水量標識がある場所は、当初設置された位置ではなく、多少移動しています。

鳥居戸

この付近は昔、「鳥居戸」あるいは「鳥居道」という地名があったといわれ、その名のおり、ここにある二本の大きなケヤキは小野神社の御神木で、以前はこの付近に「一の鳥居」があったと伝えられています。

また、このあたりから北の方向に「一ノ宮渡し」があったといわれています。

聖蹟桜ヶ丘まつり (平成5年10月23日、24日)

明治26年に三多摩地域が神奈川県から東京府に(当時東京府)に移管されてから今年で百年になるのを記念し、TAMAらいふ21事業として、三多摩各地で様々な催し物が行われました。

多摩市でもこの一環として、平成5年10月23日、24日の両日に「聖蹟桜ヶ丘まつり」を開催しました。

今回、「聖蹟桜ヶ丘まつり」の一つの事業として、また、多摩市の百年の移り変わりを見つめてきた多摩川水量標識が、さらに今後の百年を見守ってゆく「タイムカプセル」として、周辺にお住まいの皆様や、ここを訪れる人々に親しんでいただくようにこの由来板を設置しました。

町名由来板シリーズ
ICHINOMIYA

一ノ宮



一ノ宮の町名の由来

「一ノ宮」の町名は、地内にある「小野神社」が「美濃国守野宮(守野宮)内天(天)系神」の皇統第一の神にまつられ、守野大明神と呼ばれたことに由来しています。小野神社については、成書元典(紀元前6世紀)の物語により創設されたといわれています。また、「延喜式神名帳」には守野大明神の「ついに小野神社」と記されており、市野で最も古く祀られる神社です。「日本三代実録」によると、元徳3年(1034年)正五位の神位を授けられました。「尊皇策」には、宮土屋名の記載があります。

一ノ宮の神所は、伊賀は家次氏城神社の御札「くさみ野宮」に当地しており、皇統事情が変化する昭和30年代前半まで続いていた。

モニュメントのデザインについて

一ノ宮町名由来のモニュメントは、一ノ宮の由来にちなみ、「祭り」をテーマとして、彫刻家の伊佐氏により制作されたものです。

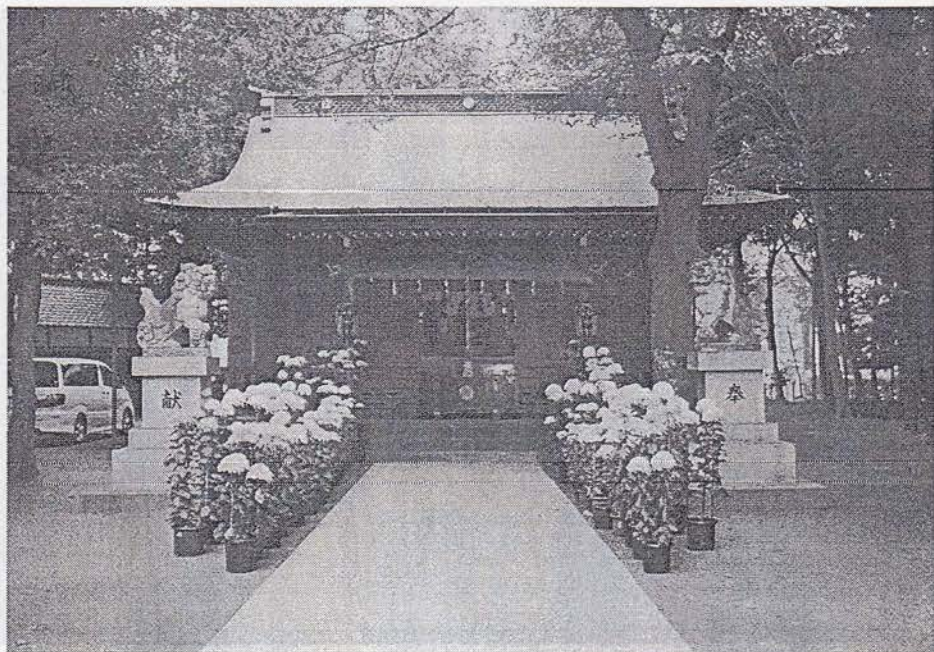
作品は、市民生活に密着した地域文化としての「祭り」の継承と、祭りばかりの昔の大衆のひびきに心をほすさせた地肌体験への想像を促すことで表現されています。



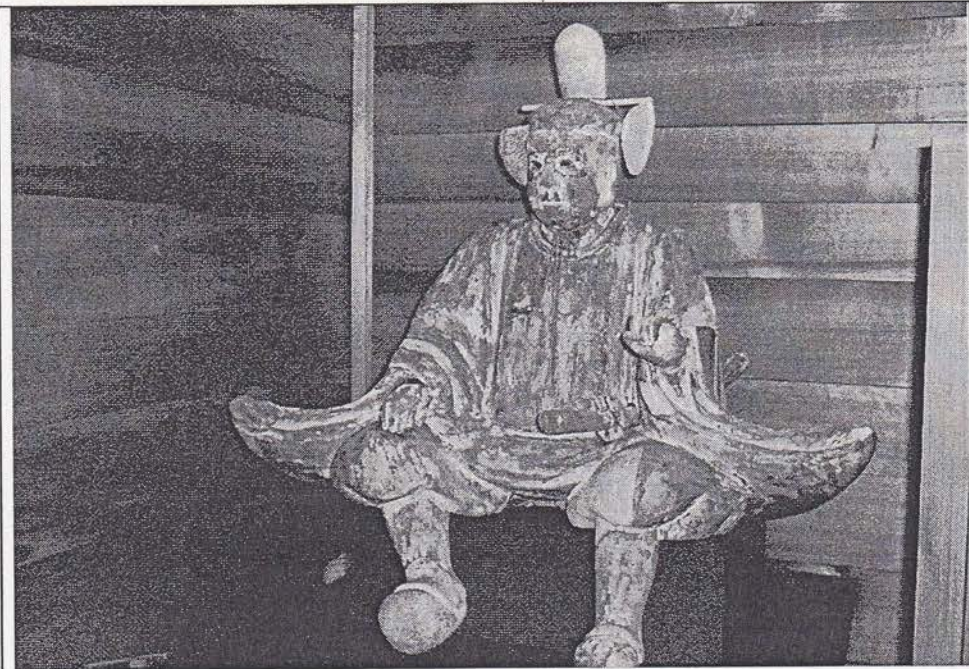
作者 伊佐 高
設置 平成11年3月
場所 宮下通り沿い
1999年〜2001年制作

- 宝亀 3年(772) ・太政官符神祇官に小野社などに統けて奉幣を奉るよう命ずとある。
- 元慶 8年(884) ・三代実録に武蔵国一ノ宮と称された記載あり。
- 延長 5年(927) ・延喜式神名帳の多摩郡八座の一つに小野社の記載あり。
- 治承 5年(1181) ・吾妻鏡に小山田三郎重成領が、訴訟により平太弘貞に安堵の記録あり。
- 建久年間(1190～98) ・畠山重忠が小野社に鳥居を寄進
- 永徳 3年(1383) ・吉富郷5カ村(関戸、連光寺、一ノ宮、寺方、百草)は、鎌倉公方足利氏満により鎌倉鶴岡八幡宮に寄進
- 室町時代 ・関東管領上杉氏の支配
- 天文 7年(1538) ・小田原北条氏の支配
- 天正18年(1590) ・徳川氏領
- 文祿 3年(1594) ・一ノ宮村の検地が行なわれる。この頃桑島万機、中山助六郎阿氏の所領
- 元禄10年(1697) ・徳川幕府領は曾我七兵衛知行地
- 延享 3年(1746) ・連光寺地内に入会地ができ、当村の飛び地となる。
- 明治元年(1868) ・品川県に属す。
- 明治 4年11月 ・神奈川県に属す。
- 明治11年11月 ・郡区町村編成により神奈川県南多摩郡に属す。
- 明治22年4月1日 ・町村合併により多摩村となり大字の一つとなる。
- 明治26年 4月 1日 ・多摩は東京府に編入
- 昭和18年(1943)7月1日 ・東京都成立

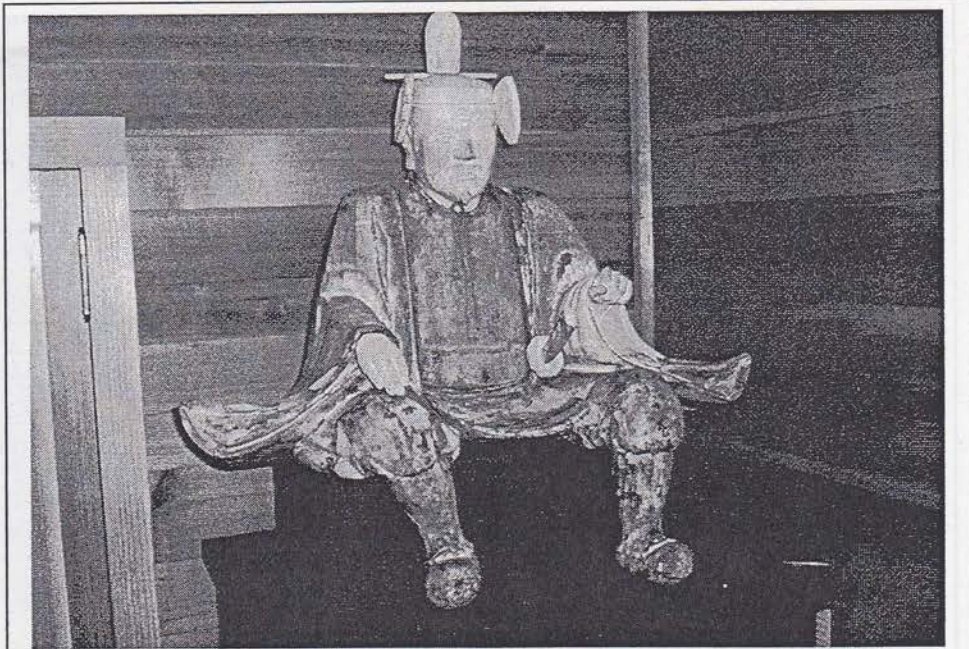
一ノ宮の歴史



武蔵国一ノ宮小野神社



木造隨身倚像(左)古像・吽像



木造隨身倚像(右)新像・阿像

聖蹟桜ヶ丘という名の由来について

多摩市は昔から桜の名所で、特に、連光寺の向ノ岡には多くの桜の木が植わっていましたが、江戸時代後半には老木となったため、万延元年（1860）、連光寺の名主・富澤政恕が村民と共に向ノ岡一帯に桜樹約 350 本を植え復興しました。当地は武蔵野台地を一望できる眺望絶勝の地であり、やがて、桜樹も成長し向ノ岡の桜林として有名になりました。その後、大正頃から昭和初期にかけて、この付近で草競馬が開かれたので桜馬場と呼ばれるようになりました。また、現在の向ノ岡桜橋付近に桜楽軒という茶屋も設けられ、戦前には花見時に都会からの来遊も多く、大いに賑わっていました。

現在では、連光寺の「旧多摩聖蹟記念館」（市指定文化財）周辺、都立桜ヶ丘公園内にはヤマザクラやソメイヨシノを中心に、約 300 本の桜が植わっています。

一方、多摩市は江戸時代から多摩川の鮎漁などで有名な地であり、明治天皇が明治 14 年（1881）から明治 17 年（1884）にかけて兎狩と鮎漁で 4 回天覧に訪れており、こうした行幸の場所を「聖蹟」といい、連光寺一帯には天皇行幸を記念してさまざまな記念碑が建てられています。

さらに、明治 14 年（1881）から大正 6 年（1917）まで、連光寺周辺が天皇や皇族たちの狩猟場である「連光寺村御猟場」に指定されたこともあって、「聖蹟」化への動きが強まっていきました。また、大正期頃から三多摩各地で観光開発が進められるなかで、「聖蹟」を核として向ノ岡一帯を名所として開発しようという構想が具体化していきました。そして、玉南鉄道(株)（現在の京王電鉄(株)）が向ノ岡の桜馬場一帯の丘陵地を借用し、これに「桜ヶ丘」と名付け、大規模な遊園地として開発しようという計画が明らかとなりました。

こうした動向の一環として、明治天皇が好んだ連光寺の地に、元宮内大臣の田中光顕を中心として昭和 5 年（1930）、明治天皇の顕彰館として多摩聖蹟記念館が建設されました。これは、連光寺を多摩御陵と並ぶ「聖蹟」と位置付けようとしたもので、記念館周辺に桜などを植え風致を整え、館を中心とした向ノ岡一帯の観光開発が進められました。また、地元でも百草・高幡不動と聖蹟記念館を結ぶ多摩丘陵に「多摩遊覧道路」というハイキングコース建設を計画するなど観光化に力を入れました。昭和 5 年の『京王電車沿線名所図絵』にも開館したばかりの多摩聖蹟記念館が大きく描かれており、京王閣、高幡不動、多摩御陵などとともに、当時の京王がいかに沿線の観光開発に力を注いでいたかが伺え、地元も含め「聖蹟」を中心に観光開発を進めることが地域発展につながると考えたからです。

こうした背景のもと、京王では昭和 12 年（1937）5 月、京王線の関戸駅を「聖蹟桜ヶ丘駅」に改称し、「聖蹟桜ヶ丘」という新たな地名が誕生することとなりました。

このように、天皇の行幸、「旧多摩聖蹟記念館」などに関係する「聖蹟」と、江戸時代から向ノ岡を中心とした桜の名所に「聖蹟桜ヶ丘」の地名は由来しています。

